



Title	三卷本『枕草子』不審本文考（六）
Author(s)	後藤, 康文
Citation	北海道大学文学研究院紀要, 161, 1(右)-26(右)
Issue Date	2020-12-18
DOI	https://doi.org/10.14943/bfhhs.161.r1
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/80043
Type	departmental bulletin paper
File Information	1002_bfhhs.161.r1.pdf



三卷本『枕草子』不審本文考(六)

後 藤 康 文

二十二

【本文】「関白殿、二月二十一日に、法興院の」の段・7

事はしまり一切経を、①蓮の花の赤き一花づつに入れて、僧俗、②上達部、殿上人、地下、六位、何くれまで持てつづきたる、いみじうたふとし。導師まゐり、講はしまりて、舞などず。日ぐらし見るに、目もたゆく苦し。

(第二百六十段・四一五頁二一行～一四行)

【三卷本諸注の解釈】

〔①について〕

×蓮の花の赤き一花づつに入れて／蓮の花の赤い一輪ずつに入れて

(『評釈』本文／通釋)

×蓮の花の赤き一花づつに入れて／蓮の造花の赤い一輪ずつに入れて／▼蓮の花の

赤い造花の蓮に経巻を載せて

捧げ歩くことをいう。

(『全講』本文／文意／釈義)

×蓮の花の赤き一花づつに入れて／蓮の花の赤い造花一枚一枚に入れて

(『旺文社文庫』本文／現代語訳)

×蓮の花の赤き一花づつに入れて／蓮の花の赤い造花一つずつに入れて／能因本、前田本「赤きに一部づつ入れて」。

(『角川文庫』本文／現代語訳／脚注)

×はすの花のあかきひと花づゝに入れて／蓮の花の赤い花一つずつに載せて／▼一切経を蓮華の赤い造花一つに

経文何巻ずつを載せたかは判らないが、とても一切経一部五千四十八巻のすべてを捧持して運んだとは考えられ

ない。恐らく大部分は既に仏前に積み上げておいて、儀礼的に少部分を一卷ずつ捧持して行列したのであろう。

(『解環』本文／口訳／語釈)

×蓮の花の赤き一花づつに入れて／蓮の花を形どった几(キ。献物の台)であらう。能本「蓮の花に(前本「の」)

赤きに一部づつ入れて」。

(『和泉古典叢書』本文／頭注)

×蓮の花の赤き一花づゝ、に入れて／蓮の造花の赤い一つずつに。一切経の巻の一つを蓮の花一つに入れたのであ

う。

(『新大系』本文／脚注)

×蓮の造花の赤い一つの花ごとに入れて／赤い蓮の花を形どった、献物をする器に、一切経を一部づつ入れて。一

切経は一千五百九十七卷ある。能本・マ本「蓮の花に（マ本「の」）赤きに一部づつ入れて」。

（『新全集』現代語訳／頭注）

×蓮の花の赤き一花づゝに入（れ）て／蓮の花の赤い（造）花一つに一巻ずつ入れて（『全訳注』本文／現代語訳）
×蓮の花の赤き一花づつに入れて（『新編』本文）

〔②について〕

・公卿・殿上人・地下・六位、以下だれかれとなく

（『評釈』通釋）

・公卿・殿上人・地下・六位、以下何々まで

（『全講』文意）

・上達部、殿上人、地下、六位などの区別もなく、あらゆる階級の人々まで

（『旺文社文庫』現代語訳）

・上達部、殿上人、地下、六位、その他の連中にいたるまで

（『角川文庫』現代語訳）

×公卿・殿上人・地下の四位五位・六位、その他の連中に至るまで

（『解環』口訳）

・▼なにくれまでもてつゝきたる　その他様々な人に至るまでが、（経巻を入れた造花を）持つて続いているのは。

（『新大系』脚注）

・上達部、殿上人、地下、六位、その他の者まで

（『新全集』現代語訳）

・上達部も殿上人も、地下、六位その他の者までが

（『全訳注』現代語訳）

・以下、行道供養、僧俗が行列して堂塔の周囲を巡る。

（『新編』脚注）

【批評】

〔①について〕

解せない本文というほかない。現本文に対応する現代語訳は「（一切経を）蓮の（造）花で赤い（色の造）花一花ごとに入れて」とでもなるのだろうが、どうも釈然としない。その原因は、後述することくこれが明白な転化本文だからだ。『角川文庫』『和泉古典叢書』『新全集』が能因本・前田本の本文を紹介しているのも、三卷本現存本文に対する疑念が拭えなかったためであろう。

〔②について〕

ここは、諸注ほとんど気にしていない箇所である。あるいはそれでよいかとも思う一方で、「地下、六位」の並びがいささか訝しい。「地下」は通常六位以下の官人を指す語なのだから、そのあとにわざわざ「六位」と記す必要はないのではなからうか。『解環』がことさら「地下の四位五位・六位」と「口訳」しているのもこの点を意識しての、苦心の意訳なのかもしれない。

さらに、「六位、何くれまで」と区切るべきか、それとも「六位何くれ」で一まとまりと見なすべきか、という問題も別にある。すなわち、「六位、その他の者まで」（『新全集』現代語訳）と読むか、「六位その他の者までが」（『全訳注』現代語訳）と解するかでその意味は必然的に異なり、区切れは「六位」が特立されることになるというわけだ。

現本文の是非とあわせて一考を要する点ではあるまいか。

【本文改定案】

〔①について〕

何がおかしいのかといえば、まず格助詞「に」の位置であって、「一花づつに」の部分は「に一花^マづつ」でなければならぬ。そして、この不注意な転倒が生じたのちに、「一花づつ」という不審な本文が生成されたに違いないのだ。つまり、元来「一切経」を「一卷づつ」または「一部づつ」と記されていたものが、「に」の移動と上の「蓮の花」に引かれて「一花づつ」に改変されたものと推量され、傍線部①本文全体はもと、

◎蓮の花の赤きに、一卷づつ入れて

〔蓮の造花の赤いのに、一卷ずつ入れて〕

または、

◎蓮の花の赤きに、一部づつ入れて

〔蓮の造花の赤いのに、一部ずつ入れて〕

であったと考えられるのである。なお、「一部」の方を原形とみるならば、右復元本文は奇しくも能因本（富岡家本）本文と同形になるが、あくまでも偶然の一致に過ぎない（【参考】欄参照）。

〔②について〕

かりに、傍線部②が祖形からの転化本文だとみる場合、次の二とおりの経緯が想定できようか。一つは、そのかみ存在した、

A 上達部、殿上人、六位何くれ まで

B 上達部、殿上人、地下 まで

の二系統の異文が校合等の過程で混合し、現本文の姿へと変容を遂げたとする考え方であり、もう一つは、

a 上達部、殿上人、^{地下}六位何くれ まで

b 上達部、殿上人、^{六位なにくれ}地下 まで

いずれかの本文にいずれかの注記的書き入れが混入したとする考え方である。結果的にはどちらのケースが真相であつたとしても、その「復元」形は、

◎上達部、殿上人、六位何くれまで

〔上達部、殿上人、（さらには）六位誰それまで〕

もしくは

◎上達部、殿上人、地下まで

〔上達部、殿上人、（さらには）地下（人）まで〕

となる。前者の本文を選択する場合、「六位なにくれ」はいうまでもなくこれで一単位とみななければならない。

以下に、あるいは参考になるかと思われる「用例」をいくつか挙げて、ひとまずこの場は収めたい。

・殿上人、地下なるも、陣に立ちそひて見るもいとねたし。

（『枕草子』「大進生昌が家に」の段／新編日本古典文学全集・三三頁一四行～一五行）

・まづ院の御むかへに、殿をはじめたてまつりて、殿上人、地下なども、みなまゐりぬ。

(同「関白殿、二月二十一日に、法興院の」の段／同・四〇七頁四行～五行)
・垣代など、殿上人、地下も、心ことなりと世人に思はれたる有職のかぎりとのへさせたまへり。

(『源氏物語』紅葉賀卷／新編日本古典文学全集①・三一四頁九行～一〇行)
・御送りの上達部、殿上人、六位など、言ふ限りきよらを尽くさせたまへり。

(同宿木卷／同⑤・四八六頁六行～八行)

【参考】

〔三卷本文〕 ①異同ナシ ②異同ナシ

〔能因本文〕 ①はすの花にあかきの一部つ、いれて(学)はすの花のあかきの一部つ、いれて(富) ②異同ナシ

二十三

【本文】「十月十余日の月のいと明かきに」の段

十月十余日の月のいと明かきに、ありき見むとて、女房十五六人ばかり、みな濃き衣を上に着て、①引きかへし
つつありしに、中納言の君の、紅の張りたるを着て、②頸より髪をかき越したまへりしが、あたらし。そとばに、
いとよくも似たりしかな。「ひひなのすけ」とぞ若き人々つけたりし。後に立ちて笑ふも知らずかし。

【三卷本諸注の解釈】

〔①について〕

・ひき隠しつゝありしに／（髪を）着こめたいでたちであつたのだが／表衣の裾をまくつて髪を中に籠めるのである。

（『評釈』本文／通釋／頭註）

×裾を返していたが。

（『大系』頭註）

×裾をまくつていた、そのとき／衣の裾を返して、髪を中に籠めるのである。『正月の参議』（一一六段）二節目参照。

（『全講』文意／釈義）

×外出の時、長い表着の裾を返し着て、その中に垂れ髪を入れるのである。

（『旺文社文庫』脚注）

×裾をはしよつていたのに／裾をはしよること。

（『角川文庫』現代語訳／脚注）

×（裾から）折り返して歩いてしたが／▼ひきかへし 地面をひきずつて汚さぬように、長い衣の裾を大きく折り返して、からげている。はしよるといった程度ではない。

（『解環』口訳／語釈）

×裾をそれぞれはしよつて。

（『和泉古典叢書』頭註）

×（その衣の裾の方を）上へ折り返して歩いてしたが。歩行の邪魔にならぬためである。

（『新大系』脚注）

×それぞれ裾を折り返していたうちで／不審。裾を表に返して、そこに髪の手を入れたものか。一説、裾をはしよつた姿。

（『新全集』現代語訳／頭註）

△裾を端折っていた時に／▼引きかへし 底本「ひきかくし」。「引き隠し」と解すれば、顔を隠すようにして、の意となるか。「引き返す」は外出時、長い着物の裾を汚さないように折り返すこと。ここは、「引き返す」と理解した。

×裾をはしよる。

(『全訳注』現代語訳／語釈)
(『新編』脚注)

〔②について〕

×首のところから髪を前に垂れていらつしやつたので、残念なことには、まるでお寺の塔そつくりの格好だちたものだ。／▼かきこし うしろに垂れないで、前に垂らした意。▼あたらし「新し」とも考えられるが、可借、残念なことにはの意がいい。▼そとば「卒塔婆」か。塔のこと、寺院建築の一つで、佛舍利を収める。現在の卒塔婆ではない。／女房がちよつと外出するばあいには、表着中に髪を隠し入れて歩くのであるが（このばあいは濃い紅色）、上臈の中納言の君がとくに張つて艶を出した紅の衣を着て、頸から髪を前のほうに振り越して歩いてゐた。その形が上だけポツンと黒くて、卒塔婆のように見えたのであろう。「あたらし」は「もう少し見立てようもあろうに、惜しいかな」の意味にとればよい。

(『評釈』通釋／頭註／鑑賞)

×▼かみをかき越し給へりしが 通説髪在意とする。あるいは上の意で、表着を頸の上方に引き上げて着た様をいうか。▼あたらし 惜しむべしの意。能因本「あたらしき」。▼そとはに 未詳。卒塔婆の説があるがいが。

(『大系』頭注)

×頸から上を着こめて、それがいかにも惜しく、そとはに実によく似ていたことだ。／▼かみをかき越し給へりし

が「かみ」は通説に髪とするが、文意が明らかでない。あるいは上の意で、表着を頸の上方に引きあげてきた様をいうか。源氏物語玉鬘の巻、長谷詣の条に「うへにのし単めくもの着こめ給へる髪のすきかけ云々」とあるのを併せ考えたい。▼あたらし 惜しむべしの意。ここは中止の形とする。能因本に「あたらしき」とある。▼そとはに 能因本には「に」がなく「あたらしきそとはよくも……」となつてゐる。このあたり本文の損傷があるらしく難解である。卒塔婆と解する説もあるがいかがか。

（『全講』文意／釈義）

×頭から髪をうしろに垂れていらつしやつたのが、フレツシユな感じでよかつた。「そとは」に、とてもよく似ていたことであつた。／▼かき越し 髪を後に垂らさずに、前にまわして垂らすさま。▼あたらし 惜しい。能因本「あたらしき」。▼そとは 卒塔婆の意か。このあたり文意未詳。

（『旺文社文庫』現代語訳／脚注）

×頸より髪をかき越したまへりしが、新しきそとばにいとよくも似たりしかな。／頸の所から髪を前にまわしておられたのが、新しいそとばになんとも似ていたことだつた。／▼かき越し 能因本「かいこし」。垂れ髪を肩越しに前にまわすこと。▼新しき 三卷本「あたらしき」。能因本「あたらしき」により訂す。▼そとば 卒塔婆と読む他あるまい。石を疊んで五輪塔とした物、木を削つてこれに模した物がある。

（『角川文庫』本文／現代語訳／脚注）

×襟もとから髪を（前へ）廻していらつしやつたのが（ふつくらと膨らんで）、お気の毒。卒塔婆（の五輪塔）にほんにまあそっくりだつたものね。

（『解環』口訳）

×▼頸より、髪をかき越し 表着に髪を着籠めず、肩越に出している。▼あたらし すばらしい髪なのに、という気持。以下文がととのわない。能本「あたらしきそとば」。

（『和泉古典叢書』頭注）

×▼頸より髪をかきこし給へりしが 頸の所から髪を前にまわしていらしたのが。他の女房は上衣を「ひきかへす」ことで、髪が下の方にたまる形となっているのに対して、この人だけは頸のすぐ下の所にたまる形となる。▼あたらしきそとば 底本「あたらしそとは」。能因本により「き」を補う。新しい卒塔婆。頸の所が髪でふくらんで、その上に頭が乗っているのが、五輪塔に似て見えた、ということ。

(『新大系』脚注)

×頸から髪を前の方へ振り越していらつしたのが残念だった。卒塔婆によくも似ていたことよ。／▼あたらし不審。「あたらし」は惜しむべきこと、また新しいこと。紅のぴんと張った衣を着て、髪の毛が前にまわって見えないので、髪が見えずもつたない、の意か。▼そとば 「そとは」を仮に「卒塔婆」と見る。梵語の音訳で塔のこと。特に死者への供養として墓の上に立てる塔や石などを言う。なぜ「卒塔婆」に似るのか不明。一説、ふくらんだ髪や着物が石を重ねた五輪の塔に似る。

(『新全集』現代語訳／頭注)

×首の所から髪を前にまわしておられたのが惜しかった。卒塔婆になんとも似ていたことだった。／▼あたらしすばらしい髪なのに惜しい、という気持ちか。能本は「あたらしき」とあって、次の「卒塔婆」にかかる。▼卒塔婆 諸注に従って「そとは」を今仮に「卒塔婆」と解した。「卒塔婆」は梵語の音訳で塔のこと。集成は「中世以前の古い墓に見る五輪塔（卒塔婆）」とする。／卒塔婆に似ているとか、「雛の典侍」とか、おそろく胸板の厚くない同僚女性を陰で笑い、笑われているのに気づかない迂遠さを作者はさらに笑う。

(『全訳注』現代語訳／語釈／余説)

×▼あたらし 「あたらしき」と同義か。本書の「あたらし」は新しいの意。一説、気の毒に（萩谷）。▼卒塔婆 背の低い石の五輪塔（萩谷）の他、細長い物もあった。村上天皇の病により「二十六箇国」に立てた「六千基」は、

「高さ七尺、径八寸」（紀略・康保四年五月廿日条）。

（『新編』脚注）

【批評】

〔①について〕

この部分、一類本本文「引き返し」を是として採る以上、

・（歌略）と聞こえさせよ、となむ。とて、裏に引き返して、私には

（『うつほ物語』蔵開上巻／新編日本古典文学全集②・三五四頁四行～六行）

・台盤などもかたへは塵ばみて、畳所どころひき返したり。

（『源氏物語』須磨巻／新編日本古典文学全集②・一七〇頁一〇行～一一行）

等の例から推して知られるように、表着を「裏返す」動作を繰り返しながら、の意にしか解釈できないのでなからうか。またそもそも、「裾をはしよる」（『角川文庫』『和泉古典叢書』『全訳注』『新編』）もしくは「折り返す」（『解環』『新大系』『新全集』『全訳注』）といった従来の解は、下接する助詞「つつ」を「て」の（よくある）誤写とみて本文を改訂しないかぎり成立しえない。その不都合を糊塗しようとしたのか、「つつ」を「それぞれ」と訳出する立場もあるが（『和泉古典叢書』『新全集』）、もとより認められるはずもないだろう。

対するに、弥富本他二類本本文に従うならば、『全訳注』が示唆しているように「上着を引っ張って顔を隠す」の意に解する可能性が浮上しくるのである。『解環』は、

女房連が道路を歩いてゆく間、その表着を折り返した状態が継続しているという意味で、この接続助詞ツツは用

いられているものと知るべきである。

(問題点)

という認識のもと、

室内では、裾をひきずるようにして着ている表着であるから、外出の際には、筵道を敷いた上を歩くような場合を除いて、必然的に、表着の裾を反して、ずっと上まで折り返しにたくし上げなければならない。結果として、背丈ほども長い頭髮は、その折り返しの中に着こめられるのであって、髪を隠すことが目的ではないから、(b)本文は明らかに「へ(字母分β)」から「く(字母久)」への字形相似による転化本文として退けられねばならない。

(同)

と第二類(b)本文を一蹴しているが、逆ではないのだろうか。上述のごとく、当該文脈における「つつ」は、「表着を折り返した状態が継続している」意を表しているのではなく、「表着を裏返す動作を反復するという意味」に取らざるをえないわけであるし、加えて、「髪を隠すことが目的ではなく、「顔」を隠すことが目的」だったと考えるならば、見方はおのずから違ったものになるはずなのだ。

〔②について〕

私に付した二重傍線部からも明らかのように、諸注まるで解説できていない。その理由を三点に集約すると、

(1)「く」とあるので、もしここで文を結ぶのであれば、形容詞「あたらし」は、能因本本文のごとく「あたらしき」と連体形であるべき点。

(2)かりに(1)の条件を満たしたとしても(『角川文庫』『新大系』)、何がどのように「あたらし」なのか結局は不明で

ある点。

(3)「そとは」はいかに解きなそうとも説明不能であり、明白な不審本文である点となる。さらに、傍線部②の構文は、

○頸より髪をかき越したまへりしが、「**x**」に、いとよくも似たりしかな。

と捉えるのが正しく、問題を煎じ詰めると、空欄**x**に相当する比喩対象Ⅱ「あたらしそとは」の七文字をどのように読み解くかに、すべてがかかっているといえるのである。

【本文改訂案】

〔①について〕

すでに述べた理由からして、一類本本文「ひきかへし」の「へ（部）」は「く（久）」の誤りと判定されるため、その「復元」形は、

◎引きかくしつつありしに

〔（着物を）引っ張って（顔を）隠しながらいたのだが〕

となり、結果的に、三卷本第二類本文と同形ということになる。以下念のため、『源氏物語』中から「引き隠す」の用例を適宜拾い出しておこう。

・今ぞやおら顔ひき隠して、とかう紛らはす。

（賢木卷／新編日本古典文学全集②・一四六頁五行～六行）

・常にひき隠しつつ歩きし御使、今日は面もちなど人々しくふるまふめり。

（藤裏葉卷／同③・四四三頁二行～三行）

・ひき隠したまへるにぞ、大臣さしのぞきたまへる。おどろきて御紐さしたまふ。

（浮舟卷／同⑥・一七二頁八行～九行）

〔②について〕

どの道不毛に終わるとするならば、大胆不敵な提案をしておく方がおもしろいだろう。やや複雑な説明になるが、最初に「復元」本文を示すと、

◎頸より髪をかき越したまへりしが、あまがつに、いとよくも似たりしかな。

〔頸（のところ）から髪（の毛）を（肩より前方に手で）掻き向けていらした（後）姿が、（人形の）「天児」に、実にそっくりであったことつたら。〕

となる。そして、本文Ⅹの変成については、

i あまかつ

← *「あまがつ（天児）」ヲ「はふこ（這子）」ノ意トスル「注記」ノ付加。

ii あまかつ

← *「注記」ノ本文文化。

iii あまかつはふこ

← *読ミナシニヨル誤写ノ発生。

iv あさましそとは

の過程が想定可能かと思われる。iii から iv への移行に関して述べるならば、「あま（万）か（可）つ（川）」↓「あさ（左）ま（末）し（之）」+「は」「ふ（不）こ（己）」↓（転倒）↓「そ（曾／所）と（止）」「は」となる。

この夜の「中納言の君」の恰好が「天児」に似ていたとすれば、若い女房連中がそれを「ひひなのすけ」と渾名して笑った、という後の記述とうまく符合することになるのではあるまいか。田舎学者の説にては、よしや、あしや。

【参考】

〔三卷本文〕①ひきかへしつ、（陽明宮勸天高富本徳伊静）―引きかへしつ、（中）ひきかくしつ、（弥刈日内早

鈴京）ひきかへしつ○（鳥）ひきかくし（宇古前河）②そとはに（陽明宮勸天高富本中弥刈徳鳥日早

宇古前河錫京伊静）―うとはに（内）

〔能因本文〕①ひきかへしつ、ありし中に（学富）②くひよりかみをかひこし給へりしかはあたらしきそとはよく

もに給ひしかな（学富）

二十四

【本文】「見物は」の段・2

うつぎ垣根といふものの、いと荒々しく、おどろおどろしげにさし出でたる枝などおほかるに、花はまだよくもひらけ果てず、つぼみたるがちに見ゆるを折らせて、車のこなたかなたにさしたるも、桂などのしほみたるがくちをしきに、をかしうおほゆ。

(第二百六段・三四五頁八行～三四六頁二行)

【三卷本諸注の解釈】

×つぼみたるがちに見ゆるを折らせて／蒼をつけているのが多いように見える(枝)を、(車副いの者に)折り取らせて
〔『評釈』本文／通釈〕

×つぼみたるがちに見ゆるを折らせて／蓄んだのが多いのを。
〔『大系』本文／頭注〕

・つぼみたるがちに見ゆるを折らせて／蓄んだのが多く見えるのを折らせて／▼つぼみたるがちに「がち」は体言または用言の名詞形に続く接尾語。ここもつぼみたる花がちにの意であろう。能因本に「つほみかちに」の異文がある。
〔『全講』本文／文意／釈義〕

×つぼみたるがちに見ゆるを折らせて／つぼみのような状態であるのを、(車副の者に命じて)折らせて

〔『旺文社文庫』本文／現代語訳〕

×つぼみたるがちに見ゆるを折らせて／つぼんだのが多く見えるのを折らせて
〔『角川文庫』本文／現代語訳〕

×つぼみたるがちにみゆるををらせて／蓄のままのが多いようなのを(従者に)折らせて
〔『解環』本文／口訳〕

×つぼみたるがちに見ゆるを、折らせて
〔『和泉古典叢書』本文〕

×つぼみたるがちに見ゆるを、おらせて
〔『新大系』本文〕

・まだつぼみのままであるのが多いように見えるのを折らせて／「たる」不審。「つぼみたるものがちに」の意か。

（『新全集』現代語訳／頭注）

×つぼみたるがちに見ゆるを折らせて／つぼみがちに見えるのを折らせて／▼つぼみたるがち 新全集は「たる」を不審とし、「つぼみたるものがち」の意か、とする。

（『全訳注』本文／現代語訳／語釈）

×つぼみたるがちに見ゆるを折らせて

（『新編』本文）

【批評】

『新全集』（頭注）が指摘するように、傍線部本文中に含まれる完了の助動詞「たり」の存在は明らかに不審であり、「たるがち」という表現はとうてい認めがたい。波線を付したとおり、この「たる」は、「だのが」（『評釈』『大系』『全講』『角川文庫』）「のままのが」（『解環』）「のままであるのが」（『新全集』）などと訳されているが無理。また、『旺文社文庫』や『全訳注』の訳文は、『全講』（釈義）が引く「能因本」本文「つぼみがちに」に対応するものとなっている。それにしても、何ゆえこのような奇形本文が矯正されることなく今日まで放置されてきたのか、まったくもって理解に苦しむ。

【本文改訂案】

思うに、不審本文「つぼみたるがちに」は、下文の「桂などのしほみたるがくちをしきに」に惑わされて生まれた誤謬本文なのではあるまいか。とするなら、嫌疑のかかる「たる」は非本来的要素と断定してよいことになり、これ

を取り除いた、

◎つぼみがちに見ゆるを折らせて

〔蕾が多く見える枝を折らせて〕

が本節傍線部本文の祖形という結論が得られるのである。なお、能因本主要二本も三卷本文と同形の「つほみたるかちに」であるため〔参考〕欄参照)、この目移りに因る誤写は、両系統の分化以前にすでに生じていたことになる。

【参考】

〔三卷本文〕 異同ナシ

〔能因本文〕 つほみたるかちにみゆるをもらせて (学富)

二十五

【本文】「成信の中将は、入道兵部卿宮の御子にて」の段・1

その君、常に物言ひ、人の上など、わるきはわるしなどのたまひしに。

物忌くすしう、つのかめなどにたててくふ物まつかいかけなどするものの名を、姓にて持たる人のあるが、こと人の子になりて、平などいへど、ただそのもとの姓を、若き人々言ぐさにて笑ふ。

【三卷本諸注の解釈】

×物忌くすしう、つのかめなどにたててくふもの、まつかいかけなどするもの名／物忌など奇特に行い、つのかめなどにたててくふもの、まつかいかけなどするものという（珍しい）姓を／▼物忌くすしう 物忌を眞面目にくくくつとめて。▼つのかめゝもの名 意未詳。「つのかめ……もの」は、なにか物の名で、そういう風變わりな姓を呼び名にもつていた人の意であろう。

（『評釈』本文／通釋／頭註）
×物忌くすしう、つのかめなどにたててくふ物まつかいかけなどするもの名／▼物忌くすしう 物忌を奇特に。

↓一八三頁注三二 ▼「つのかめ……いかけなど」文意不明。前田本「する人のめにたて、くふものましかりかいわけなど」。能因本にはない。誤脱あるか。
（『大系』本文／頭註）

・もの忌くすしう、つのかめなどにたててくふものまつかいかけなどするもの名／物忌を奇特に……などするもの名／▼つのかめ云々 以下二十字ばかり文意不明。誤脱あるか。前田本に「する人のめにたて、くふものましかりかいわけなど」とあり、能因本にはこの部分を欠き、「くすしう」からただちに「するものの」に続く。

（『全講』本文／文意／釈義）
・物忌くすしう、つのかめなどにたててくふものまつかいかけなどするもの、名／神妙に物忌をして、「つのかめなどにたててくふものまつかいかけ」（この二〇字意味不明）などするもの、名／▼物忌くすしう 神妙に物忌を慎んで。上卷三九八頁注（五）参照。▼「つのかめ」以下未詳。「め」は、海藻か。「にたてて」は「煮たてて」

か。後考をまつ。

〔『旺文社文庫』本文／現代語訳／脚注〕

×物忌くすしう、つのかめなどにたててくふ物まづかいかけなどするもの名／物忌をやかましくやる人がなにかする物の名／物忌を几帳面にする意であるが下文と関係があらう。「つのかめ」以下「かいかけなど」まで文意不明。前田本「する人のめにたて、くふものましかりかいわけなど」。能因本は欠く。

〔『角川文庫』本文／現代語訳／脚注〕

×ものいみくすしう、つる・かめなどにたてて、くふ物まづかいかけなどするもの名／大層縁起を昇いで、鶴や亀なんか（の細工物）に立てて、食べ物をまず搔き取ったりする物の名（箸＝土師）

〔『解環』本文／口訳〕

×鶴亀などに立てて、食ふ物まづかいかけなどする物の名／鶴亀を形どった箸台（解環）。「鶴二翼ヲ立テ箸台ト爲シ、銀箸一双、同じ一枚之ニ安ス」（兵範記仁平二年八月廿九日）。底本「つのかめ」、改訂。能本「かいかけなど」までなし。前本「する人のためにたててくふものましかりかいわけなどする物の名を」。

〔『和泉古典叢書』本文／頭注〕

×物忌くすしう、つのかめなどにたててくふ物まづかいかけなどするもの名／▼物忌くすしう 物忌を神妙にして、の意だが、下文が難解のため続き具合は十分に明らかでない。▼つのかめ 以下「かいかけ」まで不詳。後続表現から人の姓に音が一致または近似する「物」の説明であることは確実で、「つるかめ（鶴亀）などに立てて、食ふ物まづかいかけ（かい搔き）などする物の名」つまり「箸」であるとする解がある。

〔『新大系』本文／脚注〕

×物忌などを神妙にする者で、つのかめなどにたててくふ物まづかいかけなどする物の名前／▼物忌くすしう 物

忌などということを神妙に（几帳面に）する者の意か。▼「つのかめ…かいかけ」まで意不明。ある女房の変った姓の説明をしていることはわかる。この部分能本にはなし。「鶴亀など立てて、食ふ物まづかい掻きなどする物の名」、即ち「箸」で「土師（はじ）氏」を言うかという説がある。「九条家本延喜式裏文書」（平安遺文五六二号）によると、「箸氏」も存在するという。

（『新全集』現代語訳／頭注）

×物忌くすしうする、「つのかめなどにたて、くふ物まづかいかけなどするもの、名」／物忌みを深く守り、「つのかめなどに、たてて、くふ物まづかいかけなどするもの名」／▼くすしうする 神妙にする。きちんと守る。▼つのかめ……以下十九字分未詳。「つのかめ……」として鶴亀二本一对で食物をかき寄せ扱うもの、つまり「箸」で「土師」氏をいうとする解もある。さらに新全集頭注には『平安遺文』に箸氏の名も見えるという。

（『全訳注』本文／現代語訳／語釈）

・物忌くすしう、つのかめなどにたててくふ物まづかいかけなどするもの名／▼物忌くすしう「物いまひなど実法にする也」（春）。縁起担ぎ全般の「物忌」は、当時稀。参考「物忌みける人」（紫日記）。▼つのかめ…もの名 不詳。「土師」「箸」「膳」など諸説ある。

（『新編』本文／脚注）

【批評】

はじめの「物忌くすしう」は、どう逆立ちしても「物忌」が「くすしい」の意にしかならない。かりに、第二類弥富本本文「くすしうする」に拠るとしても、「くすしうする」を「几帳面にする」「きちんと守る」などと解するのは許しがたい拡大解釈であるし、そもそもここでなぜ「物忌」が出てくる必然性があるのか不明で、問題はそこから問

われねばならないはずなのだ。『新編』（脚注）が「縁起担ぎ全般の「物忌」は、当時稀」と特記しているのも、こうした疑問が背景にあったのではないかと推量される。

そして、多くの注釈書が「意未詳」（『評釈』）「文意不明」（『大系』『全講』）「意味不明」（『旺文社文庫』『旺文社文庫』『全訳注』）「意不明」（『新全集』）「不詳」（『新大系』『新編』）として白旗を掲げる「つのかめ」云々の不審本文である。これを何としても解き明かすべく敢然と立ち向かったのはほかならぬ『解環』のみ。

さて、その独自解読案とは、『江家次第』の「件著台多作二鶴形」、『厨事類記』の「箸台銀雙鶴羽上案^レ箸」、『台記』別記の「御箸一雙^{在台以金鶴形}」といった記事を根拠に、

縁起を祝った箸の台に鶴の形が常に用いられることは、明らかとなった。亀の形が用いられることも推して知るべきである。歴史的基準が、「物忌み奇しう鶴亀などに立てて、食ふ物先づかい欠き（又ハかい分け）などするもの」が「箸」であり、その箸に音韻相通ずる宿禰姓（又ハ連姓）に「土師^{ハシ}」があることを立証したのである。

（問題点）

と力強く主張するものであり、『和泉古典叢書』の支持を得るに至っている。けれども、いわずもがな、「鶴の箸^ハ、台^ハがあった」∴「鶴亀の箸^ハがあった」∴「姓は「箸」∥「土師」氏である」という理屈が成り立つはずもなく、努力と熱意を認めるに吝かではないものの、この『解環』説は「論理的基準」をまったく満たしていない妄説として、黙殺されねばならないのである。

【本文改訂案】

まず、「物忌くすしう」の部分だが、ここは「ものいひすくすくしう」の見誤りであろう。「すくすくし／すくすくし」とは、

・なほ、あたは、重りかにおはする人の、ものに情け、おくれ、すくすくしきところつきたまへるあまりに

（『源氏物語』 葵卷／新編日本古典文学全集②・二六頁九行～一〇行）

・あはれをも多う御覧じすぐし、すくすくしうもてなしたまひしを

（同須磨卷／同・一九一頁九行～一〇行）

・対面のついでに、心深きさまなることどもをのたまひつづけしには、えすくすくしきも返さひ申さでなむ。

（同若菜上卷／同④・五二頁三行～五行）

・このたびは、いますこしをかしきに、いかなるまめ人にかあらむ、すくすくしうさし歩みていぬるもあれば、笑ふを

（『枕草子』「うちの局」の段／新編日本古典文学全集・一三〇頁七行～九行）

などの用例から知られるとおり、「情け」「あはれ」「をかし」「心深し」などで形容される情趣や陰翳とは無縁な素気なさ、良くいえば実直、悪くいえば無粋な性質もしくは言動を表す語である。この女房が、粗雑で「ものいひ」も「すくすくし」い人物であつたらしいことは、のちのくだり、

この兵部来て起せど、いみじう寝入りたるさまなれば、「さらに起きたまはざめり」と言ひに行きたるに、やがてあつきて、物言ふなり。しばしかと思ふに、夜いたうふけぬ。「権中将にこそあなれ。こは何事をかくゐては言ふぞ」とて、みそかにただいみじう笑ふも、いかでかは知らむ。曉まで言ひ明かして帰る。また「この君いとゆゆしかりけり。さらに、寄りおはせむに、物言はじ。何事をさは言ひ明かすぞ」など言ひ笑ふに、遣戸あけて、女

は入り来ぬ。

(新編日本古典文学全集・四二四頁一二行、四二五頁五行)

において明かされることになる。波線部「この君いとゆゆしかりけり」云々という清少納言の「非難」は、日頃「人の上など、わるきはわるし」ときっぱり裁定していた成信が、その実、こともあろうに「ものいひ」も「すすくし」い「わるき」女房とわけありで夜通し語り明かして帰る仲だとわかった、その落差への「失望」表明にほかならない。ついで、難解至極な「つのかめ」以下であるが、構文としては「 x など、 y などするものの名」とみて間違いないはずで、 x ＝「つのかめ」、 y ＝「にたててくふ物まつかいかけ」。と、そこまではよいとして、残る x と y のあるべき本文とその意味を確定することは残念ながら困難である。よって今は仮答案として、以下のように推理しておきたい。すなわち、①「つのかめ」の「かめ」は、古代から煮炊きに用いられた土師器＝「甕」の意、②「にたててくふ物」は、『旺文社文庫』が示唆するとおり「煮立てて食ふ物」の意、③「かいかけ」は「掻い掛け」で甕を竈に素早く掛ける意と解せないかという提案である。

以上をまとめると、「復元」本文の暫定形は、

◎ものいひすすくしう、つの甕など、煮立てて食ふもの物まづ掻い掛けなどするものの名

〔ことば遣いがぶつきらばうで、「つの甕」ほか煮立てて食べる食材を（入れて）真っ先に（竈に）さっと掛け（て調理す）る土器の名称〕

ないし

◎ものいひすすくしう、つの・甕など、煮立てて食ふもの物まづ掻い掛けなどするものの名

〔ことば遣いがぶつきらばうで、「つの」や「甕」など煮立てて食べる食材を（入れて）真っ先に（竈に）さっと掛

け（て調理す）る土器の名称」

となり、「土師」氏の迂遠な表現と見なせることになる。前者のごとく「つ、甕」が一語ならば「角甕」「筒甕」「吊甕」など、後者のごとく二語並列ならば、「壺・甕」「杯・甕」などの意が、あるいは当てはまるか。この点も含めて、①②の証明・裏づけが不十分であることは百も承知だが、今はこれをもつて当座の解答とするほかない。

なお、能因本の本文は、三卷本二類弥富本本文「くすしう[する]」↓「かいかけなと[する]」の目移りで一行（二十二字程度）脱した形かと思われる。だとすれば、弥富本本文の形は、両系統分岐前からすでにあったことになるのだが、その点に関する考察は本稿の目的とするところではない。

【参考】

〔三卷本本文〕 ものいみくすしうつのかめ（陽明宮勸天高富本中刈徳烏日宇古前河鈴京伊静）——ものいみくすしうするつのかめ（弥）物いみくすしうつのかめ（内）ものいみ人すしうつのため（早）

〔能因本本文〕 ものいみなとくすしうする物の猶（学）ものいみなとくすしうするもの、猶（富）